

まえがき

「漢字はむずかしい」と、だれもが言います。私も、それが嘘だとは思いません。しかし、それにもかかわらず、私は、十数年にわたり、「漢字はむずかしくない」ことを主張し続けてきました。これは、矛盾したことのように思われるでしょうが、決して矛盾ではありません。

何だってそうですが、同じことでも、やり方ひとつでむずかしくもなり、やさしくもなるからです。今まで、漢字が難しいと言われてきたのは、漢字の正しい学び方をだれも教えてくれなかったからです。さらにその原因を尋ねると、その研究がだれからも顧みられなかったからです。

私自身、大学におけるある時期まで、漢字ほどやっかいな、面倒なものはない、と思っていました。ですから、私には、読むことはできるが、書けない漢字が多くて、「漢字なんて無用な存在だ。かなで十分に用が足りる」などと、うそぶいていたものです。

大学二年の時、岡井慎吾博士について、「説文^{せつもん}¹」の講義を受ける機会を得ました。説文は古来難解な書物として、その講義のできる先生は世に少ないと言われていました。岡井先生は実に、世に類いなき先生であったのです。私は岡井先生の講義を聴いているうちに、漢字の構造の妙に惹きつけられ、先生のお宅まで訪問して教えを受けるほどになりました。

¹ 「説文解字」は、最古の部首別漢字字典。略して説文ともいう。後漢の許慎の作で、和帝の永元12年に成立し、建光元年に許慎の子の許沖が安帝に奉った。本編14編・叙1篇の15編からなり、叙によれば小篆の見出し字9353字、重文1163字を収録する。漢字を540の部首に分けて体系付け、その成り立ちを解説し、字の本義を記す。ウィキペディア

説文は、恐らく世界最古の「字典^{じてん}²」でしょう。世界における紙の発明は、西暦105年、後漢の蔡倫による、と言われていますが、説文の著者許慎の歿年は、これに遅れること16年の121年と見られています。説文は当時の中国で使用されていた9353字の漢字の持つ意義用法を、その字の構造から分析し、解説したものです。当時としては実に感嘆すべき「大字典」です。

ともあれ、1800年以上の昔の字典ですから、難解なのは当然です。しかし、岡井先生の導きで、この書物の読み方が一応飲み込めるようになりますと、ほんとに寝食を忘れて解説に耽^{ふけ}るようになり、漢字の原始の姿のおもしろさ、また、漢字全体の構成の妙をしみじみと楽しく味わったものです。そして、いつの間にか、漢字を書くのにも少しも苦勞しない自分になっているのに気づきました。

漢字は、その成立の過程からして、縦に横に深い関連を保ちつつ、体系的に創作され発展していったものです。それは、地上の万物がそれぞれ深い関係の下に存在しているのを、そのまま反映している文字だからです。だから、そういう漢字を何の関連も考えずに、一つ一つばらばらに切り離して、学習していったのでは、理解しにくいのが当然です。いや、理解しにくいだけではありません。せっかく苦勞して覚えても、その記憶を保つことができません。これでは、「漢字はむずかしい」と嘆くのが当たり前です。

これに反して、漢字の構造を理解して、体系的に学習していくならば、ちょうど網の真中を持って引き上げるようなもので、関連のある漢字がひとりりで

² 同音異義語に注意が必要。辞典:言葉[英和辞典]、事典:事物[百科事典]、字典:文字[康熙字典]

理解でき、しかも、それがお互いに支え合って記憶を保つことができるのです。私が、「漢字はむずかしくない」と言うのは、こういう学習をすれば、やさしいということなのです。

昭和26年、私は、東京都の一角で指導主事という仕事をしていました。それは、小中学校の先生方の相談役というような仕事でした。そこで先生方から訴えられた悩みの最大のものは、「漢字が読み書きできないために、あらゆる教科の学習が妨げられている」ということでした。「どうしたら漢字力を十分に養うことができるか」と私は、研究課題をこの一点にしぼり、“漢字の科学的な指導体系”を作ることに努力しました。

昭和27年11月17日の朝日新聞の東京都下版に、四段抜きトップ記事として、

児童の言語生活を豊富に

「漢字教育が必要」

——八王子教委石井主事近く研究成果発表

という見出しの記事が掲載されました。しかし、私の考えを実行に移してみようという先生はありませんでした。そうだ、自分でやってみなければいけない。机上の空論ではだれも信用しないのがあたりまえだ。そう考えた私は、小学教師になる決心をしました。

旧制高校の教員免許状しか持たなかった私は、新たに小学校教師としての勉強をし、その免許状を取って実施に第一歩を進めたのは昭和28年の四月でした。以来14年間、この三月末に退職するまで、研究と実践を繰り返してきました。その結果、はっきりと分かったことは、

一、小学校の一年生は、今の十倍量の漢字を学習することができる。

二、小学校の三年生までに、今の中学生程度の漢字力をつけることができる。

三、漢字の体系的な学習は、思考力を高め、推理力を増し、他教科の学習にも役立つ。

ということでした。

今の若い人は、と言うと、まず“書く力”の弱いことが、だれからも指摘されます。漢字を記憶だけに頼って学習させていたのではむずかしいだけでなく、頭脳の正しい発達が望めません。

私の提唱する、“漢字学習法”は、人間の知的理解と情的興味との両面に立ち、やさしく、楽しく学習できて、しかもそれが一つの能力として他のあらゆる学習の上に役立つものです。ぜひ、正しい漢字の学び方を体得して、高い読書力をつけ、正しい文章が書けるようになって頂きたいと思います。本書は、きっとその役に立つことを信じます。

石井 勲

昭和42年7月25日

館長注記：原文は縦書きであるが、横書きに変更している。また、漢数字での表記の多くを算用数字に変更している。